



目次

ウィリアム・ウィルソン	4
黒猫	61
黄金虫	87
メールストロムの旋渦	187
早すぎる埋葬	235
落穴と振子	273
アッシュヤー家の崩壊	315
盗まれた手紙	365
モルグ街の殺人事件	417
十三時（森林太郎訳）	498

ウィリアム・ウィルソン

WILLIAM WILSON

それをなんと言うのだ？

わが道に立つかの妖怪（ようかい）、恐ろしき良心とは？

チェインバリン（1）「ファロニダ」

さしあたり、私は自分をウィリアム・ウイルスンという名にしておくことにしよう。わざわざ本名をしろして、いま自分の前にあるきれいなページをよごすほどのことはない。その私の名前は、すでにあまりにわが家門の侮蔑（ぶべつ）の——恐怖の——嫌悪（けんお）の対象でありすぎています。怒った風は、その類（たぐ）いなき汚名を、地球のはてまでも吹き伝えているではないか？ おお、恥しらずな無頼漢（ならずもの）のなかの無頼漢！——現世にたいしてお前はもう永久に死んでいるのではないか？ その名譽にたいして、その榮華にたいして、その燦然（さんぜん）たる大望にたいして？——そして、濃い、暗澹（あんたん）とした果てしない雲が、とこしえにお前の希望と天国とのあいだにかかっているのではないか？

私はいまここで、たといそれができたにしても、自分の近年のなんとも言いようのない不幸と、許しがたい罪悪との記録を書きしるそうとはしまい。この時期——この近年——に背徳行為が急にひどくなったのであって、そのそもそのき

っかけだけを語るのが、私のさしあたっての目的なのである。人間というものは普通は一步一步と墮落してゆくものだ。ところが、私の場合では、あらゆる徳が一時にマントのようにそっくり落ちてしまった。わりあいに小さな悪事から、私は大またぎにエラガバルス（2）だつてやれないような大悪無道へ跳びこんだ。どうしたためぐり合せで——どんな一つの出来事からこんな悪いことになったのか、私が語るあいだ、しばらく耳を貸していただきたい。死は近づく。それを前ぶれする影は、私の心をやわらげる。ほの暗い谷（3）を歩みながら、私は世の人々の同情を——むしろ憐（あわ）れみをとりたいのであるが——切望している。自分がいくらかは人間の力ではどうにもできない境遇の奴隸（どれい）であつたということ、私は世の人々に信じてもらいたいのだ。これから語ろうとする詳しい話のなかで、私のために、広漠（こうばく）とした罪過の砂漠のなかにいくつかの小さな宿命のオアシスを、捜し出してもらいたいのだ。以前にもこれほど大きな誘惑物は存在したではあろう。が、しかし、少なくともこんなふう

人間が誘惑されたことは前には決してなかった——たしかに、こんなふうには落ちこんだことは決してなかった——ということに認めてもらいたいのだ。——これは誰でも認めずにはいられないことであるが。とすると、こんなふうには苦しんだ人間はいままで一人もなかったであろうか？ 実際、自分は夢のなかに生きてきたのではなからうか？ そして自分はいま、この世のあらゆる幻影のなかでももつとも怪奇なもの、恐怖と神秘との犠牲として死んでゆくのではなからうか？

私は、想像力に富んで、しかもたやすく興奮する気質のために昔からずっと有名だった一族の子孫である。そして、まだごく幼いころから、この家族の性格を十分にうけついでいる証拠をあらわしていた。成長するにしたがって、その性格はいっそう強く発達し、いろいろな理由で、友人たちにはたいへん心配をかけたし、また自分自身には非常な損害をかける原因となった。私は我儘（わがまま）になり、もつとも放縦な気まぐれにふけり、まったく手におえない激情の虜（と

りこ）となってしまった。両親は、気が弱く、私自身と同じような生れつきの虚弱に悩まされていたので、私の特徴となったその悪い性癖をとめることはとてもできなかった。幾たびかの弱い、方針を誤った努力は、親たちのほうの完全な失敗に、そしてむしろ私のほうの完全な勝利に、終わったのだ。そのときから私の言葉は一家の法律となった。そして、普通の子供ならまだ手引紐（てびきひも）（4）さえ放せないような年ごろから、私は自分の思うままにさせられ、名だけは別として、自分の行為の主人公となったのであった。

学校生活についての私のいちばん古い思い出は、霧のかかったようなあるイングランドの村にある、大きな、不格好な、エリザベス時代風の建物につながっている。その村には節瘤（ふしこぶ）だらけの太木がたくさんあって、どの家もみなひどく古風だった。実際、その森厳な古い町は、夢のような、心を鎮（しず）めてくれる場所であった。いまでも、私は、空想でその樹陰ふかい並木路（なみきみち）のさわやかな冷たさを感じ、その無数の灌木（かんぼく）のかぐわ

しい芳香を吸いこみ、組子細工のゴシック風の尖塔（せんとう）がそのなかに包まれて眠っているほの暗い大気の静寂をやぶって、一時間ごとにふいに陰鬱（いんうつ）な音をたてて響きわたる教会の鐘（ベル）の深い鈍い音色に、なんとも言えない喜びをもって新たにうち震えるのである。

この学校と、それに関したこととの、こまかな思い出にふけることがおそらく、いま自分のどうやら経験できるいちばん多くの快樂を私に与えてくれるのだ。私是不幸のなかにひたされてはいるのだが——ああ！ただあまりに真実すぎる不幸——二、三のとりとめのない事がらを述べたてて、ほんの少しの一時的なものであるうとも、慰めを求めることは、許してもらえらるう。そのうえ、これらの事がらは、まったく小さな、またそれだけとしてはばかばかしいものではあるが、のちに自分にすつかり蔽（おお）いかぶさった運命の最初のおぼろげな警告を自分が認めた時と所とに関係のあるものとして、私の空想には偶然的な重大さを持つているものなのだ。だから、回想させてもらいたい。

その家は、前に言ったように、古くて不規則なものであった。構内は広くて、てっぺんにはガラスのかけらを漆喰（しっくい）に植えつけた、高い、丈夫な煉瓦塀（れんがべい）が、その周囲をぐるりと取りまいていた。この牢獄（ろうご）く）のような墨壁が私たちの領土の限界になっていたのだった。その外（そと）は、一週に三度しか見られなかった。——一度は毎土曜日の午後、二人の助教師に連れられて、一団となつてどこか付近の野原をしばらく散歩することを許されるときで、——あとの二度は日曜日に、村に一つある教会の朝と夕との礼拝式へ、いつも同じ決つたとおりに列を組んで行くときであった。その教会は、私たちの学校の校長が牧師なのであった。この校長が厳かな、ゆつくりした足どりで説教壇へ上がってゆくのを、私はいつも、廻廊（かいろう）にある遠く離れた私たちの座席から、どんなに深い驚きといぶかしさで眺（なが）めたことであろう！あんなにしかつめらしく温和な顔をして、あんなにつやつやした、あんなに僧侶（そうりよ）らしくひらひらした衣服を着て、あんなに念入りに髪粉をつけた、

あんなにいかめしい、あんなに大きな仮髪（かつら）をつけたこの尊い人が、——この人が、ついさっきまで、苦虫をかみつぶしたような顔つきで、嗅煙草（かぎたばこ）でよごれた着物を着て、木篋（きべら）（5）を手にしながら学校の峻巖（しゅんげん）な法則を執行していた人なのであるうか？ おお、あまりに奇怪でどうしてもわからない大きな不思議！

その重々しい扉の一つの角に、もつと重々しい一つの門が厳然として立っていた。それは鉄の螺釘（ねじくぎ）を方々に打ちつけて、上にはぎざぎざの鉄の忍返（しのびがえ）しを打ってあった。なんとという深い畏怖（いふ）の感じを、それは起させたことであろう！

その門は、さきに述べたあの三回の定期の出入りのときのほかに、決して開かれることがなかった。そして開かれるときには、その巨大な蝶番（ちようつがい）がぎいっと軋（きし）るたびごとに、私たちはその音のなかに、かずかずの神秘を——厳かな注意や、あるいはもつと厳かな冥想（めいそう）をそそる多くの事がらを——見出（みいだ）したのであった。

広い構内は形が不規則で、大きなひっこんだ所がたくさんあった。そのなかのいちばん大きな三つ四つのが運動場になっていた。そこは平らかで、細かい堅い砂利を敷いてあった。そこには樹（き）もなければ、腰掛け（ベンチ）もなく、それに類したものがなにもなかったことを、私はよく覚えている。むしろその運動場は家の背後（うしろ）にあったのだ。前面には、黄楊（つげ）やその他の灌木類を植えた小さな花壇があった。しかし、この神聖な区画は、私たちは実際ほんのたまにしか通ったことがなかった。——たとえば、初めて学校へ上がったときとか、最後にそこを去るときとか、あるいはたぶん、親か知人が迎えにきて、クリスマスや夏休みにいそいそと家へ帰るときとかだった。

だが、その校舎たるや！——なんとという奇妙な古い建物だったろう！——しかも、私にとってはまったくなんという魔法の宮殿であつたらう！ その曲りくねりには——そのとても理解できない細かな区分は、ほんとうに果てしもなく

った。いつであるかと、いま自分のいるところは一階か二階かということ、確信をもって言うことはむずかしかった。どの室（へや）からでも別の室へ行くには、きつと三段か四段のぼるか降りるかしなければならなかった。それから、脇（わき）へそれる道は無数にあつて、——ほんとうに想像もできぬほど、——実に何遍も何遍ももとへ戻つて来るものだから、この屋敷全体に関する私たちのいちばん正確な観念も、私たちが無限ということについて考える観念と、さほど大して違わないくらいだった。ここに住んでいた五カ年のあいだ、私は、自分自身と他の十八人か二十人ばかりの生徒とに割当てられた小さな寝室がどんな遠く隔たった場所にあつたのか、はつきりと確かめることがどうしてもできなかった。教場は建物のなかで——いっそ、世界じゅうで、と私は言いたい——いちばん大きかった。それは非常に長くて、狭く、陰気なくらい低く、上の尖（とが）つたゴシック風の窓がついていて、天井は樫（かし）であつた。室の端っこの、なんとなく怖いような気のする一つの角に、八フィートか十フィートくらいの四角

い囲いがあつて、そのなかには、私たちの校長である尊師ブランスビー博士の「祈禱（きとう）時間中」の聖室（サンクタム）があつた。それは堅牢（けんろう）な造りで、がっしりした扉（とびら）がついていて、「先生（ドミニネ）」の留守中にその扉をあけようものなら、私たちはまったくいっその *peine forte et dure*（強い厳しい刑罰（6））で死んだほうがましだと思ふくらい目の前にあつた。他の角にも似たような仕切りが二つあり、実際、前のよりはずっと尊敬されてはいなかったが、それでもやはり非常に畏怖の念を起させるものだった。一つは「古典」の助教師の講壇で、もう一つは「英語および数学」の助教師のであつた。室内のあちこちに、際限のない不規則さで「ちや」「ちや」に入り交つて、無数の腰掛けと机があつた。どれも黒くて、古風で、古ぼけていて、ひどく指垢（ゆびあか）のついた書物がめちやくちやに積み重ねてあり、名前の頭文字や、略さないで書いた姓名や、怪異な形の絵や、その他さまざま小刀（ナイフ）で彫りつけたものなどの、創痕（きずあと）をつけられているので、かつては多少

かたちを残していた原形の少しさえすっかり失(な)くなってしまっている。水を入れた大きな桶(おけ)が室の一方の端に立っていたし、もう一方の端には途方もない大きさの柱時計が立っていた。

この古びた学校のがっしりした壁に取りまかれて、私は、それでも退屈もせず厭(いや)にもならず、自分の生涯(しょうがい)の十歳から十五歳までの年月を過したのである。子供の豊かな頭脳というものは、それを満たしたり楽しませたりするにはなにも外界の出来事が必要としない。そして見たところ陰気なくらい単調な学校生活は、私が青年時代に奢侈(しゃし)によって得たよりも、あるいは壮年時代に罪悪によって得たよりも、もつと強烈な刺激に満ちていたのであった。でも、私の最初の心の発達には普通ではないものが——常軌を離れたものさえ——よほどあったということは、信じないわけにはゆかない。一般の人々にとっては、ずっと幼いころの出来事は、大きくなってからはつきりした印象を残していることがめつたにないものだ。すべてが灰色の影——かすかな不規則な記

憶——あわい快樂と幻のような苦痛とのおぼろげな寄せあつめ——である。私にはそうではない。子供のころ、私は、いまもおカルタゴの賞牌(メダル)の銘のようにありありした、深い、長もちする線で記憶に刻みこまれているところのものを、大人のような力をもつて感じたのにちがいないのだ。

と言つても、事實は——世間の目から見れば——そこには思い出すことはなんと少ししかなかったことだろう！ 朝の目覚めや、夜ごとの就寝命令、復習や、暗誦(あんしょう)、定期的な半休や、散歩、運動場での喧嘩(けんか)や、遊戯や、悪企(わるだく)み、——こんな事がらが、長いあいだ忘れられていた心の妖術(ようじゆつ)によって、あまたの感覚、かずかずの豊富な出来事、さまざまな悲喜哀樂の感情、もつとも熱情的な感動的な興奮などを味わせてくれたのだ。『*Oh, le bon temps, que ce siècle de fer!* (おお、この草昧(そうまい)の時代の、楽しかりしころよ！)

実際、私の熱情的な、熱狂的なまた横柄(おうへい)な気性は、間もなく自分

を学友たちのなかでのきわだった人物にさせ、また少しずつ、しかし自然な順序を踏んで、自分よりはさほど年が上ではない者全部に権力を揮（ふる）うようにさせてしまった。——ただし、それにはたった一人だけ例外があった。この例外というのは、なんの縁故もないのではあるが、私自身と同じ洗礼名と姓を持っている、一人の生徒なのであった。——このことは、事実、大して珍しいことではなかった。なぜなら、貴族の出ではあるが、私の名は、長いあいだ用いられてきた権利によってよほど昔から庶民の共有物となつていのように思われる、あのごくありふれた名前の一つであつたのだから。この物語では私は自分をウイリアム・ウイルスンと名づけることにしているのであるが、——これは実名とあまり違わぬ仮名なのである。学校の言葉で、「我々の仲間」と言っている者のなかで、この私の同名者だけが、あえて学科の勉強でも——運動場の競技や喧嘩でも私と競争し、——私の断言を盲目的に信ずることや、私の意志に服従することを拒み、——私の専断的な命令になんでもと事ごとくに干渉したのであった。も

しこの世に最高無条件の専制政治というものがあるなら、それは一人のぬきんでた子供が、その仲間たちの気の弱い心にたいして揮う専制政治である。

ウイルスンの反抗は、私にはこの上ない当惑の種であつた。——人前では彼や彼の言い草を空威張りであしらうようにとくに気をつかつたものの、内心では彼を恐れていた。また、彼が私にたやすく対等に振舞つているのは、彼のほうがほんとうは上手（うわて）である証拠だと思わずにはいられなかっただけ、ますます当惑の種であつたのだ。だから負けまいとするためには、私は絶えず努力をしなければならなかつた。だが、この彼のほうが上手であるということは——彼が私と対等であるということさえも——私自身のほかにはほんとうに誰一人として気がつかないのであつた。私たちの仲間は、なにか妙な愚かさのために、そのことは疑いさえもしないらしかつた。実際、彼の競争も、彼の抵抗も、ことに私の意図にたいする彼の無遠慮なしつこい干渉も、きびきびしたものであるというよりも、むしろ内々のものだつた。また、私を駆りたてて卓越させようとする野心も、熱

情的な心の力も、彼は持っていないようだった。彼の敵対は、ただ私自身を邪魔したり、驚かせたり、あるいは口惜（くや）しげらせたりしようとする気まぐれな欲望だけからやっているらしいと考えられた。もともと、ときには、彼の無礼や、侮辱や、反抗のなかに、あるひどく不似合いな、たしかにひどく癩（しゃく）にさわる親切ぶかい態度をまじえるのを、私は不審と屈辱と、立腹との気持をもつて認めざるをえないことがあった。この奇妙な挙動は、人を保護したり、かばったりするような卑（いや）しい態度をとりたがる、完全な虚栄心から起るのだ、としか私には考えられなかった。

たぶん、ウィルスの行為のこの後者の特徴が、二人の名が同じだということと、二人が同じ日にこの学校に入学したという単なる偶然の出来事と一緒になつて、私たち二人が兄弟なのだという考えを、その学校の上級生の間にひろげたのであろう。上級生というものは普通は下級生のことを大して精確に詮議（せんぎ）はしないものだ。私は前に言ったが、あるいは言うべきであったが、ウィルソン

は私の一家とはどんなに遠い親族関係もなかったのである。しかし、もし私たちは兄弟であったとしたなら、たしかに二人は双生児であったにちがいない。なぜなら、ブランスビー博士の学校を去ったのち、私は自分の同名者が一八一三年の一月十九日に生れたのであることを偶然に知ったのだ。——そしてこれはちよつと珍しい暗合であった。というのは、その日はまさしく私自身の誕生日なのであるから（7）。

妙に思われるかもしれないが、ウィルソンが我慢ならない反抗精神で敵対して私を絶え間なしに不安にさせていたにもかかわらず、私はどうしてもまったく彼を憎むという気にはなれないのであった。たしかに二人はほとんど毎日のように喧嘩をしたが、その喧嘩では、彼は表向きは私に勝利をゆずりながらも、なにかの方法で、ほんとうに勝ったのは彼であることを私に感じさせるようにした。けれども、私の高慢と、彼の真実の威厳とは、いつも二人を「言葉をかわすくらいの間柄（あいだがら）」にしていたのであった。一方、二人の気質には実によく